
十二月のラヴソング

シャロク坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十二月のラヴソング

【Nコード】

N46320

【作者名】

シャロク坊主

【あらすじ】

仕事帰りに出会ったツイントールのストリートミュージシャン。泣きのギターとくだらない歌に、詩を読むように生きる男の足が止まる。

仕事が終わった。くだらないジャズ。スウィングを決めながら日々をこなす。人と話すのは苦痛だが、しばらくすると慣れてくる。「使える」と「使えない」の怒号。あと何回繰り返すとか、不毛なことは考えない。考えてしまうと、休むべき四分休符で、スタッカートを切ってしまう。

妙なことを考えるのも、寒さのせいだろう。商店街の外れのゲームセンターの前、行儀よく寄せられた自転車が並んでいる。もちろん違法だが、法律もそう正しいとは言えない。なにせこのゲームセンター、夜の十二時には閉まってしまう。

素通りして、ポケットの中の音楽を切り替える。余韻が切れて寒気が増す。流れてきたのは甲高い女の声。何がよくて持ち歩いたんだろう。もう一度切りかえると、あまりにも聞き慣れたhip-hopが繰り返される。諸行無常を歌うことほど簡単なことはない。一度死ぬか？

と思うほど、追い詰められてもいない。けれども毎日考える。本当に死にたかった頃のリフレイン。ずっと、本当に、棺桶に収まるまで。あぶられて煙になっても、灰はまだまだ歌っている。

たららったたらーと鼻歌を歌いながら歩く。シャッターの閉まった商店街。こっちの方がふさわしい。まだ魚の腐った臭いが残っている。野菜の生臭さと、人間の足の臭いも混ざっている。ひどいものだ。こんなものはさっさと潰れてしまった方がいい。

そっぴや、最後に飯を買ったのはいつだろうか。

そんなはずはないのに、もう思い出せないぐらい、昔のように思えてくる。

プツン。

ツンとした静寂が耳を襲う。冷たい空気がイヤホンを吹き飛ばす

ように、頭の中を吹き抜けていく。空気圧の差が苦しくなって、俺はポケットに音楽をしまう。

電池が切れて、世界に音が戻る。

見えない場所から音楽が聞こえてくる。

音につられる。電車が終わるまで、まだ少し時間がある。追いかけたいと思つて、追いかけてるわけじゃない。ただの習性。花に集まらない虫なんて、この世に存在する意味があるか？

ギターの音色。正確なリズム。若々しい伸びのある声。でも歌い方は抑えめ。

急に人が増える。話し声。ノイズ。耳障りな笑い声。黄緑とピンクの看板。一回五千円から、上を見上げればきりが無いマンション。二十人。三十人。数字というものが意味をなくす。これはただの、たくさんの足音。

少女は分厚いコートに身を包み、静かな声で静かな歌を歌っている。夜にはふさわしいが、街にはふさわしくない。この街に靴屋がいくつあると思う？ 少女の声は届かない。

ツインテールの黒髪がしっとりと湿っている。そう言えば、今日の夕方雪が降った。いったいいつから歌っている。地面に打ち捨てられたキャップには金が詰まっている。たくさんの十円玉。混じった百円から上の小金。心得ている。最初から何枚か十円玉を入れておく。そうしないと、誰も、百円玉を入れてくれない。

美人だった。気が強そうな瞳を隠すように、伏し目がちに歌っている。やさぐれているようにも見える。コートのポケットからは、ほっかいろ。足元にもたたくさん落ちている。手持ちはもうそれだけか？ シャッターに立てかけたリュックにはまだ何かが詰まっているのか？

「それからというもの」と少女は歌う。

それからというもの。

彼女は一人で足音に耳を澄ます。

待っているものは来ない。
今日もありえないにすぎってしまう。

語尾はまだ続いている。過去じゃない。つまらない歌だと思う。周りを見回しても、誰も聞いているものはない。けれどおもしろい歌ってなんだと言われても、俺には答えようがない。俺の分は擦り切れてる。

さようならともう一度言えたなら。
どんなに嬉しいことだろう。

覚悟の先には何も無い。
彼女は捨てたいだけなんだから。

リュックから距離を置いて、シャッターにもたれて腰を下ろす。ケツが冷たい。鞆を下に敷く。鞆に他の使い道なんてない。どうしてくだらない歌に付き合おうと思ったのか。たぶん、俺はそういう奴だからだ。じゃなきゃとつくに生きていない。

でも歌はそこで終わる。
少女はチラリと俺を見る。
不満かい？ 悪いね、こんなおっさんで。
他意はないから続きをどうぞ。歌わない君に用はない。

少女は腰に取りつけたホルスターから、拳銃のように、水の入ったペットボトルを取り出す。
飲みこんで、苦そうな顔をする。

「それでは次の曲に行きます」と、誰にともなく、人の流れに向けて話しかける。

とうるるっーりらーららーららーあーらあ。

愛する人はどんな気持ち？ 猫のミルクよりも甘い？

違う自分になりたいよ、あなたを温められるほど。

世界が移り変わるなんて、どうでもいいよ、でも、まだ。

あなたの傍で歌あっていたあいよお。

じゃんじゃーじゃじゃんじゃーん。

「あの」

少女の声で目を覚ます。いつの間にか眠ってしまったらしい。時計は？ ああ、なるほど。もう取り返しのつかない時間だ。

「もう、終わりましたよ？」

心配げな声。俺を見つめる少女の瞳は、熱くうるんで光っている。それはたぶん、雪のせいで、ここがあまりにも寒すぎるからだ。

人波はもう途切れてしまった。明日は何曜日だったか。どちらにせよ、世界は一日分の年を取る。

「よかったよ」と俺は言った。「この寒いのに俺を寝かしつけるなんて」

「寝るなんてひどいです」と少女はすねる。

「いいんだよ、つまり俺は、起きなきゃならないことを忘れていられたんだから」

少女は怪訝そうに何かを言いかける。

「幸せだったってこと」と俺は言う。

そうですかと少女は満足げに笑って、「当然なのです」といきがる。

「私の歌を聞いたら、みんな幸せになるはずですよ。クリスマスにサントさんからプレゼントなんてわけにはいきませんが……。ね、わかりますよね？」

わかるような気がした。

今頃寝ている連中には、きっとサンタが来ているのだろうと思っ
た。

「明日はどうするんだい？」と俺は聞いた。「またここで歌うの」「
明日はこたつで丸くなります」と少女は答えた。「それに、約束
があるんです」と付け加えて、今から緊張してやがる。どうやらよ
っぽど大事な人に会うらしい。

「久しぶりなんです」と少女は言う。「別れるたびにもう二度と会
えないかもしれないと思うような人たちなんです」

「……そうか」と俺は頷いた。

財布から金を取り出そうとして、やめた。

代わりに、時計をプレゼントした。

俺があげられるものなんて、せいぜい、盗み続けてきた時間くら
いなものだ。

「ありがとうございます」と少女はお辞儀をする。

いいんだと俺は笑う。

溜めた時間を預けたせいで、俺の中で止まっていた何かが動き始
める。

「じゃあ、また」

「はい。さようなら」

繰り返される泣きのギターのリフレイン。

俺の命はあと何分持つだろうか。

やっぱりくだらない歌だよと思しながら、俺は、ポケットの中の
音楽に火を入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4632o/>

十二月のラヴソング

2010年10月23日03時55分発行